

整理番号	発刊日	Title	タイトル訳	出典	所見等	情報提供者
2021 -155	2021/9/1	The CVL's Time Has Come	軽空母の時代が来た	Proceedings Vol.147/9/1,423	 正規空母の補完として軽空母 (CVL) を建造するよう提言しています。後半に読者コメントを付けました。プロシーディングス誌 9 月号から。	岩崎洋一
2021 -156	2021/9/29	Moving Marines Across the Pacific Could Be Littoral Combat Ship's Next Mission	太平洋の向こうに海兵隊を輸送するのが LCS の次の任務になるかもしれない	USNI News 2021/9/29	 使い道のない LCS を、海兵隊を西太平洋に運ぶプラットフォームにしようという話が持ち上がっています。けれども、ミッション区画を海兵隊員の居住設備にするには難があり、高速で数時間程度の移動しか現実性はない。また、上陸させるのに岸壁が必要で、海岸に乗り上げてバウランプで上陸することができない。それであれば、今ある遠征高速輸送艦 (EPF) で十分だ、などという意見もあります。12 ページ以降に付けた読者コメントが、LCS の悪評をすべて物語っています。	岩崎洋一
2021 -157	2018/9/30	AN UNDERWATER SPOILER ON A WARSHIP: WHY, WHEN AND HOW?	戦闘艦艇の水中スポイラー:なぜ、いつ、どのように?	Scientific Journal of Polish Naval Academy Journal, 30/9/2018,p5-23.	 本件は、艦尾に装着することにより推進抵抗の低減や安定性などの向上に寄与する水中翼 (ハルベーン) に関する文献です。水中翼のメーカーである Hull Vane 社の論文であり、学術的な面よりもどちらかと言うとアピールや売込みの要素が強い感じがしますが、その分特徴やメリットなどが分かりやすくまとめられております。今後の哨戒艦などの計画や設計の評価などに参考となるものと期待できる文献と思料します。	高木康之
2021 -158	2015/9/2	A Life-cycle Cost Analysis of the Application of a Hull Vane® to an Offshore Patrol Vessel	外洋哨戒艦へのハルベーン®適用のライフサイクルコスト分析	SNAME 13th International Coference on Fast SEA Transportation, 2015-028, 2015/9/2	 ハルベーン (艦尾水中翼) をオランダ海軍の Holland クラス 108m 外洋哨戒艦に適用した事例についての論文です。実艦でのデータが知りたいところですが、やはり CFD などを使った解析結果を中心に提示されております。燃費や CO2 などの排出量の低減、動揺やウェーキなどへの効果によるヘリコプターや RIHB などの運用性の向上などに踏み込んだ記述があり、既存艦への適用や現在計画中の哨戒艦などへの参考資料となると考えます。	高木康之
2021 -159	2021/9/30	U.S. Marine F-35Bs to Embark on Japan's Largest Warship in October	米海兵隊の F-35B が 10 月に日本最大の軍艦に着艦する	USNI News 2021/9/30	 現時点で、すでにどこか (四国沖?) で実施中と思われる。周辺各国の海軍の動きも、時期的にいい季節を迎えて活発になっていることが、後半に出てきます。	岩崎洋一
2021 -160	2020/10/20	First steel cut for the French Navy Patrouilleur d' Outre Mer (POM)	フランス海軍パトリエール・ドトレ・メール (POM) が起工	EDR ON-LINE 2020/10/20	 フランスの新型哨戒艦である。太平洋、インド洋に点在するフランス領の領海を守るため、UAV を最大限活用し、幅広い任務を行うようである。	清水 隆
2021 -161	2021/9/6	Royal Navy warships sail for permanent basing in the Indo-Pacific region	英海軍艦艇は、インド太平洋地域における恒久的な基地確保のために出港します	NavyLookout 2021/9/6	 英哨戒艦のインド太平洋地域への配備のニュースは、日本人にとっては古き良き日英同盟の再構築をも絡めて、好意的な取扱いになっているように感じています。また、英国も対中関係において、志が同じである証のように捉えられている場合もあります。しかし、英国は強かであり、自国利益優先が本音のようです。一方で、派遣される最新のリバー級バジジ 2 の装備はもちろん、クルー制やその他の運用実態は、我が国でも構想中の哨戒艦のよき参考になると思われます。当然、日本への寄港もあると思われるので、機会があれば是非見学したいと思います。	本山泰之
2021 -162	2021/9/30	U.S., U.K. Aircraft Carriers Drill with Japanese Big Deck Warship in the Western Pacific	米英空母が西太平洋で日本の大型艦と共同訓練	USNI Nwes 2021/9/30	 米英空母打撃群の動きと海上自衛隊および周辺各国の海軍の動向をまとめています。巻末に載せた読者コメントが面白いです。	岩崎 洋一
2021 -163	2021/10/5	VIDEO: Japan's Largest Warship Launches U.S. Marine F-35s; First Fighters to Fly from Japanese Ship Since WWII	ビデオ: 日本最大の軍艦から米海兵隊の F-35 が飛び立つ、日本の軍艦から発艦する戦闘機は第二次大戦後で初	USNI Nwes 2021/10/5	 「いずも」に海兵隊の F-35B が着艦したビデオです。将来は垂直着艦ではなく、短距離着艦 (SRVL) もできれば、高い運用効果が期待できます https://youtu.be/a6WqRCALGd0	岩崎 洋一

整理番号	発刊日	Title	タイトル訳	出典	所見等	情報提供者
2021 -164	2021/2/12	Royal Navy submarines and non-acoustic sensor technology	英海軍潜水艦と非音響センサー技術	NAVY LOOKOUT 2021/2/12	   <p>我が国では、潜水艦の探知・被探知に関する話題は、音響的手法によるところが大半と言っても過言ではないと思います。これは、我が国における潜水艦の探知・被探知に対する技術的検討や研究開発が、音響的手法一辺倒であることを示しているとも評価できると思います。一方で、本稿にもあるように、目を海外に向けると、ロシア、英国に限らず、非音響手法が極めて長期に亘り、地道に研究がなされていることが想像されます。彼の国も磁気やUEPなどの非音響的手法による探知技術の研究に非常に力を入れていると聞きますし、それを応用した海底探知網をすでに構築しているとの情報もあります。これらのことから、我が国潜水艦関連技術について、大きな危惧の念を感じている次第です。常に盾と矛双方の視点を持ち、課題を抽出、従前の観点に囚われない発想のもと、継続して研究開発を進めていくべきと考えました。また、本稿を読み、非音響的手法の一つである航跡探知技術は、今日研究が盛んな水中光通信技術とも通底する分野であると直感した次第です。航跡探知技術では、水中光通信などの研究が将来、有機的に連携し、大きな成果を挙げられるのではないかと勝手に想像しました。加えて、AI万能の風潮も久しい昨今ではありますが、AIとて適切な手法で取得された、正確なデータが無くては、何も成し得ないことを銘記しました。このため、まずは各種運用中データを地道に蓄積していくことが極めて重要性であると考えます。</p>	本山泰之
2021 -165	2021/10/11	Hurt USS Connecticut Highlights Ship Repair Shortfalls At Key Guam Base	傷ついたConnecticutが重要基地グアムにおける艦船修理能力不足を露呈した	Forbes 2021/10/11	 <p>米原潜Connecticutが10月2日に南シナ海で海中物体と衝突し、グアム島に回航、直ちに入りよ、修理に着手するのかもしれないと思ったら、なんとグアムにはConnecticutをいきよさせるドライドックがないそうです。16年前は海中衝突したSan Franciscoをいきよさせるドックがあったのに。記事を読むとグアムにおける造船能力がここ20年で極端に縮小されているようです。</p>	佐々木 司
2021 -166	2021/8/18	U.S. Navy Investing \$1.7 Billion to Improve Portsmouth Naval Shipyard	米海軍は17億ドルをポーツマス海軍工廠の改善に投資する。	Naval News Staff 2021/8/18	 <p>ポーツマス海軍工廠に17億ドル(1900億円)投資するとのことですが、なんと景気の良い話です。</p>	川原梅三郎
2021 -167	2021/10/1	Navigate by the Stars—From Beneath the Waves	波の下から天測航法をする	Proceedings Vol. 147/10/1,424 2021/10/1	 <p>潜水艦の潜望鏡を使って天測航法をする話です。昔からこの技術はあったようです。日本の潜水艦も当然持っていると思いますが。水上艦にもこの種装置が望まれるのではないのでしょうか。専門外なので誤訳があればご容赦ください。プロシーディングス誌 10月号から。</p>	岩崎洋一
2021 -168	2021/10/18	Russia's New Multirole Artic Patrol Ships to Feature Cruise Missiles	ロシアの新型多目的北極圏哨戒艦は巡航ミサイル装備を想定	NavalNews 2021/10/18	 <p>ロシアが建造中の新型北極圏用砕氷艦にはコンテナ型ミサイルが搭載される模様です。このミサイルシステムはいかなる船舶にも搭載可能であり、貨物船を偽装して敵に近づき、ミサイル攻撃をすることができます。船舶だけでなく車両や貨物列車からも発射できる恐ろしい兵器です。ロシアはこの兵器の輸出も検討しているようです。</p>	佐々木司

整理番号	発刊日	Title	タイトル訳	出典	所見等	情報提供者
2021 -169	2021/10/1	Progress report: Manta – the Royal Navy’s experimental autonomous submarine	進捗報告:Manta – 英海軍の実験用自律型潜水艦	NAVY LOOKOUT 2021/10/1	  <p>近年、各国で大型UUVを装備化するべく、盛んに研究開発が進められています。これは、国ごとに開発目標や装備化のイメージは異なると思いますが、有人潜水艦の機能を何等か補完するピークルに育て上げる意図があることは間違いのないと思います。英海軍のリチウムイオン電池を動力源とした大型UUVは試験段階ですが、その研究費には産学官間にて設立された基金からも拠出されているとのことで、日本との違いを痛感します。大型UUV自体に話題を戻しますと、装備化にはと全く新規の運用部隊とその基地、整備支援機能などが必要になってくると考えられます。これらが搭載可能な規模の潜水艦やその他の船舶を保有しない海上自衛隊で言えば、艦艇部隊、航空部隊に続き、UUV部隊が設立されるようなイメージになるかと思いますが、大型UUVに掛けられている期待は非常に大きいと思いますが、装備化には人、もの、金に関する相当の覚悟と実行力が必要だと思います。限られた防衛予算のなか、ある程度の配備数を確保し、時代の要求である人的被害を局限していくためには、大型UUVの装備化は不可欠と考えます。このため、当分野の技術動向を注視し、将来構想を入念に練っていく必要があると思います。UUVには、通信手段、航続力、ペイロードなどの根源的な技術課題があると思います。通信手段は、水中光通信は通信距離が短く、水中音波通信は隠密性や通信速度に難点があるなど、衛星通信や水上艦の関与が当面必要に思いますし、航続力の短さ、ペイロードの少なさも制約事項です。米中は開発競争に鎊を削っていることは間違いなく、日本もどうかしてはいただけません。できるだけ多くの方が関心を持ち、関わっていくのが望ましい分野の一つと考える次第です。</p>	本山泰之
2021 -170	2021/10/13	Sale of Last Conventional Supercarriers Deals Final Blow To Museum Hopes	最後の非核推進スーパーキャリアの売却は、期待された記念艦への道を閉ざす	USNI News 2021/10/13	 <p>軍艦を記念艦として保存するしないの話。関係者が期待した空母「キティホーク」の記念艦はできなくなり、スクラップにされるということです。記念艦の維持には莫大なお金がかかり、例えば戦艦「ニュージャージー」の場合、年間500万ドル(5億5千万円)の運営費と100万ドル(1億1千万円)の保険料がかかるそうで、「キティ」のようなスーパーキャリアはそれより多くかかるということです。</p>	岩崎洋一
2021 -171	2021/10/20	Navy Investigation into USS Bonhomme Richard Fire, Major Fires Review	「ボノム・リシャール」の火災に関する海軍調査「重大火災レビュー」	From the Command Investigation 2021/10/20	 <p>身内の恥を世間に公表していますが、ここまであけっぴろげに言われては、米海軍の度量の広さなどと感心するより、深刻な軍事組織の衰えを感じさせます。戦術、作戦、規律など他の面でも大丈夫なのでしょうか？詳細は巻末の報告書原文(434ページ、60ページ)を参照してください。</p>	岩崎洋一
2021 -172	2021/10/21	Navy Board Set to Improve Fire Safety After Report Finds Sailors ‘Unprepared to Fight Blazes in Port	海軍の調査委員会は、乗員が港湾内火災への即応態勢が不足していたという報告を受け、火災安全を是正する	USNI News 2021/10/21	 <p>火災事故報告を受けての話です。最後に出てくる「ハイエンドの火災検知システム」が気になります。</p>	岩崎洋一
2021 -173	2021/9/25	Anadolu Shipyard launches new LCT for Qatari Navy	アナドル造船所がカタール海軍向けの新しいLCTを進水	Naval News 2021/9/25	 <p>令和4年度の概算要求において共同事業として輸送船舶の取得(2隻:102億円)が計上されました。島嶼部への輸送機能を強化するため、中型級船舶(LSV)1隻(58億円)及び小型級船舶(LCU)1隻(44億円)を取得とのことですが、対象となる輸送船舶はこのようなイメージではないかと思料します。</p>	高木康之

整理番号	発刊日	Title	タイトル訳	出典	所見等	情報提供者
2021 -174	2021/10/19	The Navy Practiced Battle Damage Repairs On The Burnt Out USS Bonhomme Richard	焼失したBonhomme Richard を基に海軍は戦闘被害修理を演練した	THE WARZONE 2021/10/19	 焼失したBonhomme Richard を解体のためにテキサス州に回航する途上で、米海軍は実艦を用いて大規模な戦闘被害復旧訓練を行いました。各所から戦闘被害復旧能力不足を指摘され、その能力向上を図るためです。NAVSEA担当部長はRIMPACで実施するSINKEX対象艦船にも同様の訓練を適用するよう要求しています。	佐々木司
2021 -175	2020/3/10	Offshore Patrol Vessels Market Development & Programmes	洋上哨戒艦船の市場開発と事業	European Security & Defense 2020/3/10	 世界のOPV 動向についての解説記事である。各国の状況に応じて仕様が決められるが、最近の動向としては、グレーゾーンに対応可能なような仕様が主流となってきている。例えば、UAV 等の無人ビークルを活用可能なヘリ甲板の装備、多様なコンテナモジュール武器を搭載可能とするスペース等の確保、センサーと戦闘システムの管制能力の装備などで、低烈度から高列度任務補助が可能な船舶のコンセプトになってきている。この記事を読むと、OPV のイメージが変わる	清水隆
2021 -176	2021/6/19	Stop, collaborate and listen : the technologies enabling underwater naval communications	停止し、協力し、耳を傾ける：海中海軍通信を可能にする技術	NAVY LOOKOUT 2021/6/19	 大きな期待とともに UUV の 研究が各国で 進められています が、航走体本体の他に、海中通信技術がその大きな技術課題になっています。UUV は、研究 開発の進展により高付加価値化された もの の 実現も夢では ないでしょう。しかし、高 性能 化に伴い高価となった UUV が、人的被害が局限さえできれば、使 い捨てでよい とは ならない と思います。運用後、無事帰還する、繰返し運用 ができるもの を完成する 必要があります。また、自律航行できるからと 言っ ても、偶発的紛争の 種 には なりません。ここで重要になるのが、海中通信 技術 である と思います。本記事は、英国、NATO 諸国での研究動向の一端を窺 見ることができましたが、欧州では音響、電磁気、光 通信 技術 を複合させ、か つ、秘匿性を確保しつつ、共同運用を念頭に置 き、開発が進められているよう です。近い将来に標準化された規格も 完成する と思われます。UUV の開発と ともに、海中通信技術の 技術動向 についても、十分注意を払っていく必要がある と思います。	本山泰之